

現代世界の持続可能性に向けた風土論の意義示す

2/18 人文地理学会地理思想研究部会オギュスタン・ベルク講演会



2月18日、キャンパスプラザ京都において人文地理学会の第84回地理思想研究部会が開かれ、フランス国立社会科学高等研究院のオギュスタン・ベルク氏が「風土性と持続可能性」と題して講演を行った。

この日の講演会は、地理学者であり、特に日本の風土に関する数々の著作を発表して日本でも知られるベルク氏が国際日本文化研究センターの外国人研究員として昨年から京都に滞在していたため、この機会を利用して人文地理学会の地理思想研究部会が同氏の最近の研究成果を踏まえた講演を依頼し、実現した。

和辻風土論の現代的意義を提起

講演に立ったベルク氏は、まず戦前日本の哲学者・和辻哲郎の著作『風土』が自らの風土研究の出発点だったとし、そこに表された和辻風土論の核心について解説した。とりわけ、『風土』冒頭の「人間存在の構造契機としての風土性」という定義に示された和辻の「風土性」論の意義を、現象学的地理学を代表するエリック・ダルデル (Eric Dardel) の「geographicite」との比較を通じて明らかにした。

続いてベルク氏は、この和辻風土論から出発して環境

決定論や現象学的地理学の限界を乗り越え、自らの風土論を切り開いてきたプロセスを紹介。特に、和辻的な風土論を実証科学的に基礎づける観点から先史考古学者のルロワ＝ゲーラン (Andre Leroi-Gourhan) の理論を応用し、内なる身体機能が技術として外に対象化され、それが象徴として再び身体に戻ってくるという関係そのものを表現した「通態(性)」という概念を確立、それによってたんなる客体的な環境にとどまらない風土論の対象領域を明確にしたことを明らかにした。

現代の危機を超える倫理へ

さらにベルク氏は、今後の風土論の展望について言及。地球環境問題に代表される現代の危機を「人間の世界がその基盤としての地球との関係を失って空回りしている」と捉えるとともに、それを解決するために必要な新しい倫理は、たんなる客体的な「環境」の認識からではなく、それに自らの存在自体が関わっているという把握、すなわち「風土」を意識することなしに生まれないと提起し、「和辻風土論はこれからの世界の持続可能性の追求における根本的な論理たりうる」としめくくった。

講演後、大阪市立大学の山野正彦教授が感想と問題提起を述べ、若い部会員を含めた熱心な討論が行われた。

